

『沖繩、時代を生きた学究 伝 東江平之』

(辻本昌弘、沖繩タイムス社、二〇一七年)

今 林 直 樹 (人間文化学科)

一九九〇年十月、大田昌秀の琉球大学退官記念論文集が出版された。その「序」に宮城悦二郎、保坂廣志とともに編者として名を連ねているのが東江平之である。筆者が東江の名前を知ったのはこの記念論文集によってであった。「編集後記」によれば、同書は、一九八七年九月に放送された琉球大学ラジオ公開講座『沖繩の戦後史』に収められた論文を中心に編集されたものであるが、同書に収録されている東江の論文は「意識にみる戦後沖繩の社会」というものである。東江は、同論文の「一 復帰をめぐる意識の分析」で「沖繩人の心」について、元沖繩県知事であった西銘順治の「日本人になりたくて、なりきれない心」とそれに対する加藤周一の「日本人になりたくて、なりきれない心」とそれに対する加藤周一の「日本人になりたくて、なりきれない心」を引き合いに出し、それに「日本人になりたくて、すでになつてしまつたと自覚する心」「日本人にはなりたくないし、日本人になつてもないと自覚する心」を加えて、順に「日本人願望型(西銘型)」「消極的日本人(加藤型)」「同化日本人(沖繩文化離脱型)」「周辺日本人(日本文化拒否型)」して類型化している。

東江はこれら四類型のうち「西銘型」と「加藤型」を沖繩の宿命または立場を象徴するものとしている。西銘の指摘する

「日本人になれない心」については「沖繩人としてしか生きられない厳然たる事実」と「異分子を排除または同化しようとするホスト文化の立場」があるとする。加藤型の消極的日本人については、沖繩のおかれた文化的立場の深刻な側面を露呈しているとし、それが「日本対沖繩」という対立図式に固有なものではなく普遍的性格を持つており、そうであるが故に「その問題を重く受け止めなければならぬ」と指摘している。こうした「沖繩の心」についての考察を踏まえて、東江は戦後、米軍統治下に置かれた沖繩で展開した日本復帰運動が沖繩にとってどんな意味を持ち得たか、または持ち得なかったがわかるとしている。ここで東江が記していることを引用しておきたい。

それは、流浪の旅から故郷に帰るような甘いものではなかった。いわんや、暖かい母の懷に抱かれるようなものではなかった。また一方、敗戦に伴う米国による占領の後、日本の独立と引き替えに引き続き日本から分離されたときも、それは断ち難い絆が断たれたとは受け止められなかった。やはりそうであったか、という怒りはあつたと思う。むしろ、外国の支配下に据え置かれたことに対する反発はあつたであろう。また、自らの命運が、全く自分の与り知らぬ間に、第三者によって決められたことに対する憤りもあつたであろう。しかし分離が比較的に平静に受け止められた背景には、日本と沖繩はもともと一つではなかった、という認識があつたのではなからうか。本来一つであつたものが、何らかの理由で

一時的に分断され、再びそれが一つに統合される、というような場合とは、どこか基本的に違うように思われる。

「沖繩の心」とそれに基づく「復帰運動の考察」に関するこの東江の指摘は戦後沖繩という時代を考える際に有益である。なぜなら、戦後沖繩、とりわけ米軍統治下の沖繩において、サンフランシスコ講和条約において沖繩の帰属が決定するまでに沖繩帰属論争が展開し、ここでは日本復帰運動だけではなく、沖繩独立論が展開し、その中で日本と沖繩との関係が歴史的、民族的立場から広く議論されたからである。戦後沖繩の政治史に関心を持っていた筆者にとつて「心理学の立場からは戦後沖繩という社会、そしてそこに生きる人々はこのように分析できるのか」と非常に興味深かったことを覚えている。

さて、前置きが長くなってしまったが、二〇一七年三月、この沖繩の心理学者である東江平之の評伝、『沖繩、時代を生きた学究 伝 東江平之』が沖繩タイムス社から出版された。著者は辻本昌弘氏である。辻本氏は本書を次のような書き出しで始めている。

沖繩本島の北部、名護湾が東シナ海にむけて口をひらいている。名護湾を囲い込むように山々が点在し、浜辺に立つと風光明媚な名護湾を端から端まで一望できる。

一九三〇年八月二五日、名護湾の畔で東江平之は生まれた。苗字は「あがりえ」、名前は「なりゆき」と読む。七男

二女のきょうだいの七男である。

この簡潔な紹介から、「東江平之」という心理学者の、現在に続くその後の長い人生を、「生活史」という視点から描いたものが本書である。

この「生活史」という研究について、著者は、本書「あとがき」で「生活史研究の意義」を記している。著者によれば、「ひとりの人生の歩みを捉えようとする生活史研究の意義」は、(一) 個別具体的な人生の記述を通じて既成の通説(人や時代に対する既成の見方)を揺さぶり、(二) 新しい見方を産み出す手がかりになることにある。著者は、東江平之という人物の個別具体的な人生を記述するために、二〇一四年四月から二七時間以上にわたってインタビューを行い、関連する文献を集めた。それは、情報量が増えるという点では「新しい解釈可能性が生まれる」ことであつたが、ともすれば「ますますわからなくなる」ということに終わる危険性を孕むものでもあつた。著者は、「ただひたすら『わからなくなる』ばかりではおはなしにならない。生活史研究は、新しい見方を産み出す手がかりになるものでなければならぬ。人や時代に対する新たな見方を産み出す契機になるような巧妙な記述が生活史研究には求められる」として、東江平之を取り巻く社会的諸関係を幅広く記述することを試みた。そのために、著者は「同時代人として東江氏と直接間接のかかわりがあつた人々」を登場人物として書き込み、「沖繩近現代史に名を残す有名人」だけでなく、

「無名の人々」もたくさん登場させるよう意を尽くしたという。

こうした「記述戦略」によってまとめられた本書について、東江氏自身は著者に対して「東江平之という人間に対して絶妙な距離をとっているね」と感想を述べたという。著者がこの東江氏の言葉を「素直にうれしく受けとっている」と記したように、それは「生活史研究」としての本書の価値を見事に表現したものであると言ってよいであろう。ぜひ一読してほしい一冊である。

さて、筆者にとって本書の中で印象的なところは、第六章「新しい世界」に記された、東江が言語心理学者から沖縄研究者へと向かっていくことを予告させた場面である。東江が二回目の米国留学を終えた一九六一年夏、帰国の途についた東江は、その途次にいとこのいたハワイ大学に立ち寄り、東江がつて調査助手をつとめた人類学者マレットキーと再開する。そのマレットキーが東江をパーティーに招いてくれた際、マレットキーが東江の今後の研究テーマについて尋ねた。それに答えて「言語心理学の研究テーマを立てつづけに並べて、こんなことをやりたいと熱意を込めて話した」東江に対して、すっかり興奮させたようにマレットキーが「そんなことを研究するのなら沖縄に帰る必要はない」と言ったという。

この場面について、著者は次のように記している。

ある意味で、マレットキーの言葉は正しいものだった。平之が構想していた研究は沖縄に帰らなくともできる——というか

アメリカにいたほうが研究にずっと有利なものだった。だが平之の反発もまた正しい。沖縄にいる研究者は、すべからく沖縄研究をしなければならぬ——そんないわれはない。沖縄にいる研究者には学問の自由はないというのでは無茶苦茶である。だが結果としては、マレットキーの言葉、しかも平之が反発さえ覚えたマレットキーの言葉は、平之のその後の人生を予言していたのである。

これを受けて第七章「沖縄人の意識構造」へと章が移る。そして、そこで沖縄研究者になっていく東江の姿が描かれる。では、なぜ東江は沖縄研究者へと向かっていったのであろうか。これも著者の記述を引用しておこう。

アメリカから帰ってきた平之の眼前に広がっていたのは、壁にぶつかり呻吟する沖縄の姿だった。アメリカが沖縄の政治を完全に牛耳り、住民が占拠した立法院で何か決議しても、アメリカ側のトップ、高等弁務官がノーと言えば葬り去られてしまう。アメリカに都合のよい範囲内でしか住民の自由は認められない。復帰運動は盛り上がりを見せていたが、復帰実現の目はまったく立っていないかった。

呻吟する沖縄の姿を見たとき、平之の脳裡にマレットキーの言葉が甦ってきた——今こそ研究者として沖縄と向き合わないといけないのではないか。このアメリカの横暴の前に、現実から目をそむけることはもう許されないのではないか。

このような東江と同じ思いを持っていたのが哲学の米盛裕二と政治学の宮里政玄であった。政治思想家の比屋根照夫は、一九五九年六月三〇日に発生した石川ジェット機墜落事件で自身の姪を失った中屋幸吉の遺稿集『名前よ立って歩け』の解題で、中屋を「五〇年代後半から六〇年代にかけて沖繩で学生生活を送った人間の典型」とし、中屋と同世代の人々に共通する体験として二つ挙げている。すなわち、第一に、幼少の頃に第二次大戦の激戦地沖繩の戦場を彷徨する悲惨な体験」であり、第二に、「対日平和条約の締結による沖繩の日本からの分離により、多感な青春期をあゝの重苦しい米軍統治下で過ごした戦後体験」である。東江は学生としてはなかったが、米国留学から帰国した琉球大学教員として六〇年代の沖繩を体験した。仲屋が石川ジェット機墜落事件をきっかけに沖繩の「現実の姿」について考えるようになり、その姿を「絶望」と見たように、東江もまた沖繩に「壁にぶつかり呻吟する姿」を見たのであった。仲屋は石川ジェット機墜落事件から七年後の一九六六年四月に自ら命を絶つたのであったが、東江は自身の研究を言語心理学から沖繩研究へと「急旋回」させたのであった。こうして、一九六三年に東江が発表した論文が「沖繩人の意識構造の研究」であった。

この東江論文は、本書の著者である辻本氏をして「不思議な論文」と評した論文である。なぜなら、それは、辻本氏の表現を借りれば、「浅はかな読みをすると、沖繩人の欠陥―事大主義にまみれた姑息な沖繩人―を暴露した自虐的な論文」であったからである。同論文には沖繩人の意識構造として「現実隔離策」「事大主義」「差意識」が指摘されていた。いずれも沖繩人に対してネガティブな内容を持つものであり、それゆえに「自虐的論文」とされたのである。先述のように、東江が沖繩研究に急旋回していった背景には、当時の沖繩の「呻吟する姿」があった。にもかかわらず、東江がものした論文は沖繩人である東江自らが沖繩人の欠陥をあぶりだすものであった。

このような東江論文に賛否が巻き起こったのは当然であった。東江論文を肯定的に捉えたのは宮里政玄、大田昌秀、新川明など、否定的に捉えたのは民芸運動に深くかかわっていた大原總一郎などであった。本書ではそれぞれの議論について詳細に記されている。東江自身は同論文の目的を「沖繩人の意識を総合的に捉えて分析することではなく、むしろ心理学的分析の手順を紹介するところにある」と記しているのだが、「分析手順」には関心が示されずに「分析結果」に強い関心が集まってしまい、東江の想像を超えて論文が独り歩きしてしまったのである。

では、なぜ、東江はこのような自虐的な論文を書いたのだろうか。先述のとおり、本書第七章には東江論文をめぐる様々なことが記されているのだが、その点は本書の本文に委ねるとして、辻本氏は、東江論文は「時代が平之に書かせたというのがふさわしい」と記している。そして、東江論文に対する「読み」としては「時代がこの論文を読んだ」としている。続けて辻本氏は次のように記す。

現在となつては切実な感覚をもつてこの論文を読むことは難しい。だが一九六〇年代はそうではなかった。沖縄でも本土でも多くの人に読まれ、結果的に平之は意識構造の研究者として世に知られるようになった。平之は、幸か不幸か自分の人生はこの論文にふり回されることになってしまったと語る。

たしかに、東江論文が発表される前年にこの世に生を受け、現在の「沖縄ブーム」とも呼びうる状況を目の当たりにしている筆者にとつて、東江論文を「切実な感覚」をもつて読むことはできないであろう。東江論文への賛否ということ言えば、沖縄文化を高く評価する立場から東江論文を批判した大原總一郎の主張こそがよりよく理解できるものである。東江自身、「アイデンティティの役割と可能性」と題する文章において、沖縄の自己評価は一九六〇年代までは「負の自己評価」が顕著であったが、「スポーツ、芸能、文学などの分野におけるめざましい活躍に加えて、農産物や沖縄のライフ・スタイルが評価され、観光や企画国際イベントが注目を浴び、基地負担の軽減が日本の重要な政治的課題の一つになるなどの諸事情を背景に、一九九〇年代以降、正の自己評価が目立つようになった」と記している。意識構造が文字通り意識が「構造化」されたものであるならば、それはそれほど容易には変わり得ないのではないかと思うと同時に、沖縄を取り巻く環境の変化に応じて変化していくものとも考える。東江氏の「沖縄人の意識」に関す

る論文は、そのように時代に応じて読まれるべきものである。もちろん、それはその時代が過ぎ去つてしまえば顧みる必要がなくなるものではなく、「点」としての過去の研究と現在、あるいは将来の研究が「線」として発展的につながっていくことであると理解したい。

言語心理学研究から沖縄研究へと巡回した東江であったが、このような東江の生き方を締めくくる文章として辻本氏は次のように記している。

平之の知人で、北米の大学で活躍した沖縄出身の研究者がいる。その研究者は多くの優れた成果を出し、教え子も世界的な活躍をしている。その研究者が、平之の人生回想「私の大学院経験とその後」を読み、こんな感想をよこしてきた。

「僕は、他人をうらやましがったことはほとんどないんだけど、東江さんの人生だけはうらやましい」

平之は、ふるさと、沖縄の地に腰を据え、仲間とともに沖縄を研究し、沖縄とともに歩むことができた。それはとてもとても贅沢なことだったのかもしれない。

平之は、今、八〇代の終わりにさしかかろうとしている。アガリヤーの七男は沖縄を生き抜いた。

沖縄を生き抜いた東江平之という人物がどのような人生を歩んできたのか。本書を読み終えて、東江平之という人物についてさらに興味が湧いてきた。その意味で、辻本氏の「生活史」

の視点からの「東江平之伝」は成功しているのではないかと思う。